



子どもたちにとって 最大の教育環境は教師自身である

野田市立尾崎小学校長 みずさわ えいこう
水沢 栄光



1 はじめに

本校は、昭和 59 年に開校し、34 年目を迎えている。私は、本校に着任して2年目になるが、11 年前まで7年間、本校で担任をしていた。昨年度は10 年ぶりに戻ってきた嬉しさや感謝の思いを込めながら学校運営を行ってきた。

開校当時は500 名を超える児童が在籍していたが、年々減少し、私が担任として在籍していた平成 12 年当時が最も少なく、その後は少しずつ増え現在は388 名である。

学級数は、普通学級 12、特別支援学級 2、合計 14 学級。今年度から言語通級指導教室《巡回指導》が開設された。

本校児童の特徴は、明るく・元気で人懐っこい児童が多い。また、言われたことは素直にやろうとするが、指示を待っていることも多いと感じている。本校だけでなく、最近の子どもたちをみていると、依存的で問題解決力が弱くなってきていると感じている。

昨年度は、学校（児童や保護者、教職員）の様子や地域のことを把握するのが精一杯であった。今年度は2年目であり、積極的に学校運営を充実させたいと努力している。

2 教職員の意識のベクトルを合わせる

(1)『明るく・仲よく・元気よく』

これは、本校が開校してからまもなく、目指す学校像として設定されたそうである。尾崎っ子のスローガンとして大きな看板が作ら

れ、今でも昇降口の上に掲示されて尾崎っ子を毎朝迎えている。

今年度も、尾崎っ子だけでなく、私たち教職員自らが『明るく・仲よく・元気よく』子どもたちと接することの大切さを確認しあった。

(2)学校教育目標の刷新

社会の構造的な変化の中で、未来に生きる子どもたちの成長を支える教育の在り方を位置付けた新学習指導要領が公示された。そこで、新学習指導要領が目指すものや本校児童の実態・課題等を踏まえ、本校の学校教育目標を刷新し、全教職員と共通理解したうえで学校運営を行っていくように心掛けた。

学校教育目標

主体的に学びに向かい、
仲間と協働できる児童の育成

(3)保護者と共通理解を図って関わる

4月に開催される授業参観前の保護者全体会で、学校教育目標について説明するとともに、子どもたちが見せる3つの顔の話を通して、子どもたちの成長のために学校（担任）と保護者が共通理解を図り、互いに関わることを呼びかけた。

3 若手教職員の育成

担任の年齢は、14 学級中、主任層平均 53 歳、主任以外の平均は 29 歳である。また経験年数については、主任層平均 30 年、主任以外の平均は5年である。さらに、5年経験

者以下の担任は5名在籍している。したがって、若手教員の育成が急務である。基本的には、日常のOJT推進を心掛けているが、以下の3点を通して育成していきたいと考えている。

(1)校内研究を通して育成

①指導案検討会

主に、学年や学団で検討会を行うことにより、少人数で意見を出し合い研修を深めることができる。

②事前授業

ベテラン教諭が事前授業を行うケースが多いが、ベテランの授業を参観する貴重な機会となっている。

③研究授業

成果や課題を出し合い、研修を深める中で授業力向上を図ることができる。

(2)モラルアップ委員会で育成

若手職員のモラルを向上させることにより、その勢いを学校運営に生かすとともに教職員としてのモラルの向上を図り教師力を高めていきたい。

①年間計画の立案

研究授業、不祥事防止研修、情報交換、懇親会、レクリエーション等の内容で年間計画を立てて実施する。

②若手授業研究会の実施

教職ライフステージ研修と連動させた授業研究を実施する。

③先輩職員からの講話

ベテラン職員から、学級経営や教科指導・生徒指導・特別支援教育等をテーマに話を聞く機会を設ける。

4 子どもたちが、主体的に取り組む活動

(1)たてわり活動の充実

たてわり遊びやたてわり給食会、全校たてわり集会等を通して、人と関わる喜びや自己有用感を獲得させる。



(2)尾崎っ子まつりの充実

11月に、半日授業参観として『尾崎っ子まつり』を実施している。(午後はPTAバザーや模擬店が行われる)尾崎っ子まつりの内容は、教科や総合的な学習の発表の場として、子どもたちが主体的に活動できるようにしている。

今年度は、「育てようとする力」を年度当初から決めることを促した。そのことにより、必要なことや指導しなければならないことが見えてくるので、今後の計画や活動がスムーズに行われることを期待している。また、保護者や児童への発表という形になるので、少しでも見ている人たちが満足できるよう学年にふさわしいプレゼンテーション力を身に付けさせたいと考えている。

5 おわりに

校長として一番大切なことは、職員をはじめ、子どもたちや保護者・地域の皆様からの信頼を得ることだと考えている。そのためには、子どもの成長と幸せをいつも心の真ん中に据えて物事を判断していくことである。そして、「子どもたちにとって最大の教育環境は教師自身である」との言葉のとおり、子どもたちの成長や幸せのためには、私たち教師の成長が一番大切である。全ては子どもたちのために努力していきたい。

学校を支える

児童の実態・地域の特性を生かした、 学校教育目標具現化への取組

市原市立白金小学校教頭

あんど
安藤

やすとし
康哉



1 はじめに

本校学区はかつて漁業が盛んであった土地であるが、現在は京葉工業地域に位置している。そのため地元で育った人、転入してきた人、工場で働く人、外国人等、様々な方々が生活をしている。

今年度本校全校児童は327名であり、その内の88名が外国人児童で、全校児童の約27%を占めている。出身国や使用言語も様々であり、日本語での日常生活に支障のある児童も多い。さらに、日本語での意思疎通が難しい保護者も多い。そうした本校の実態を踏まえ、新任教頭として学校教育目標具現化のために、どのように取り組んでいくべきなのか、悩み模索を続ける毎日である。①学力の向上 ②心の成長 ③体の成長の3点と保護者・地域・中学校区との連携の視点から、特色ある学校づくりと教頭の役割と取組について述べたいと思う。

2 3つの柱(知・徳・体)

(1)基礎学力定着への取組

本校では基礎学力定着を目的として、日々の授業実践の他に朝自習の時間を使い、週3回を読書タイム・週2回をドリル学習の時間として取り組んでいる。その他市より派遣されている基礎学力定着特別講師、学習サポーターの先生方と協力し、主に算数で少人数指導を行っている。また、週1回放課後の時間を使い、全教職員で協力し補習授業を行っている。更

に日本語での日常生活に支障のある児童のために、日本語指導担当教員、及び市派遣の日本語指導協力員と連携し、日本語指導が必要な児童の取り出しによる日本語指導を行っている。

そのような取組において、私は教頭の役割として、それぞれの取組に担当者を割り当て、取組方法等について効果を検証しながら定期的に協議を重ねている。また、教諭・講師・市嘱託職員・ボランティア等様々な立場の方々が混在しているため、その連携と調整を行い、児童の基礎学力向上のための取組が効果的になるよう努めている。

(2)人の役に立ち思いやりのあるねばり強い子の育成

日々の教育活動において、「人の役に立つ行動をする」をキーワードとし、認め合う学校づくりのための取組を行っている。児童会を中心とした「いじめゼロ運動」や感動体験のある学校行事の創出等、多種多様な個人をお互いに認め合い、豊かな人間関係づくりを推進している。また、防災教育においては地域との合同防災訓練を行うなど、地域との連携を中心に、安心・安全な学校づくりを推進した。

いのちを大切にする道德教育、そして「自分の命は自分で守る」を合い言葉に、「自助・共助」の気持ちの育成を図っている。

これらの取組においても、教頭として学校行事や児童会の取組の検証、地域やPTAとの連絡調整を行い、少しでもスムーズで効果

的な教育活動が行えるように努めている。

(3)元気でたくましい子の育成

運動会・マラソン記録会・縄跳び記録会等
体育的行事の充実と、体育の授業における各
体育カードの活用等を通して、児童の体力向
上・運動能力向上を図っている。

また、家庭と連携した基本的な生活習慣の
定着にも課題がある。夜間仕事に出る家庭も
多いため、宿題・家庭学習・食事・就寝時間・
起床時間等の生活習慣の確立ができていな
い児童が多い。

教頭の役割として、学級担任との連絡を密
に取り、児童個々の特性や事情に合わせた取
組を進めている。また保護者との協力が必要
な時、場合によっては担任と教頭の2人で家
庭訪問するなどの連携を行っている。生活面・
体力面・食育も含めて、日々「元気でたくま
しい子の育成」を推進している。

3 保護者・地域・中学校区との連携

(1)保護者・地域との連携

保護者・地域との連携は、子どもたちの
健やかな成長のために必要不可欠なものであ
る。その中心の一つにPTA活動があり、運
動会など学校行事への協力・資源回収やバ
ザーなどの取組が行われている。保護者の
方々は大変学校に協力的であり、学校教育の
支援を目的に熱心に活動を行っている。

地域も大変学校に協力的であり、毎日の
交通安全指導や図書の読み聞かせ、環境整
備活動等に積極的に参加してくださっている。
また、町会主催の祭事への招待等、町会長を
中心とした学校教育活動の支援や歴代PTA
会長の方々の学校支援活動なども行われてい
る。

そのような様々な方々の学校への思いは強
く、大変ありがたいものであるが、その思い
を受け止めながら、いかに調整していくかが

重要である。そしてその地域からの支援が子
ども達にとってより効果的なものとなるよう、
取り組んでいくことが教頭の役割であると考え
ている。

(2)中学校区との連携

中学校区での学校間連携にも力を入れている。
進学先中学校、及び同じ中学校に進学
する他の小学校との定期的な情報交換・生徒
指導会議・授業参観・中学校による出前授業
等の取組を行い、中1ギャップの解消や中学
校生活への意識付けなどを図っている。

また、児童生徒に関する情報を共有するこ
とにより、生徒指導面での支援にも活用して
いる。

このことに関しては、教頭として連絡調整
を図るのはもちろん、リーダーシップをとり積
極的に必要な支援について提案していく必要
性を感じている。

4 おわりに

「強い意志を持つ 心豊かで たくましい
子の育成」が本校の学校教育目標である。

学校長の経営ビジョンの具現化のため教頭
として果たす役割は多い。子どもたちと最も
接する機会の多い学級担任を支援し、若年
教員を育てながら、子どもたちへの支援も考
える必要がある。また、地域や関係機関など
外部との調整を行い、子どもたちにとって効
果的な取組を考えていく必要がある。

まだまだ至らない部分が大変多く、校長先
生、そして教職員に支えられてばかりであるが、
私の今までの経験や研修等で培ったことを生
かし、多くの方々との連携を密にしながら、子
どもたちの健やかな成長のために、努力を重
ねていきたい。

学校を
動かす

信じ抜く

八千代市立阿蘇小学校教諭

みやたけ けいこ
宮武 恵子



1 はじめに

自然豊かな本校は、地域の方々の愛情にたっぷり包まれて、創立144周年を迎える。

身も心も洗われるような環境の中で、勤務できることに感謝の思いで一杯である。

全校児童120名。担任と兼任しているため、教務主任としての校務は十分とは言えないが、校長・教頭の指導のもと、全児童の幸福のために、全職員の連絡・調整に取り組んでいる。

2 心を耕す読書を軸に

(1)一人100冊読破

本校は、国語科を核とした授業研究を継続し、39年目を迎える。一年間に一人100冊・全校で一万冊の読破を目指し、朝のチャレンジタイムには、週3回の読書を位置付けた。学校司書の協力を得て、一週間に一人5冊の貸し出しを行っている。

(2)家庭学習カードの充実

全国学力・学習状況調査の結果を基に、毎年家庭学習カードの改善を重ねてきた。その意図を理解し、保護者の方には進んで協力をいただいている。目指す家庭学習の時間を明記し、教科書の音読、今月の詩、読書、新聞の購読、パソコン、TV、スマホ等の時間を決める、宿題・鉛筆を削る等、学年に合わせた項目を児童が振り返ることで、全校の家庭学習が定着してきた。

3 一流に出会う

芸術の道で活躍する一人芝居の雲母（きらら）さんが、児童への読み聞かせのために、週に一度来校してくださる。

また、3年生の農家の仕事、4年生の調べ学習、2分の1成人式、6年生のキャリア教育等を絶好のチャンスと捉え、一流のゲストをお迎えしている。例えば、元全日

本サッカー選手の母、ディズニーキャラクター原型師、絵手紙の先生、八千代市中央図書館館長、ソプラノ歌手等である。本物に出会う大切さを児童の目の輝きから実感する。

また、「こども県展」に取り組むため、初若年職員に声をかけ、皆で美術館へ出掛けた。自ら本物に出会い、一流に触れることで、子どもたちの可能性を最大限に引き出すことができるように、願いを込めて全力で取り組んでいる。

4 見通しを持って

小規模校なので、一人の職員がいくつもの校務分掌を担っている。誰もが見通しを持ち、先手を打って教育活動に当たることができるよう、月曜日には再来週の週報を発行。裏面には、教育新情報や児童・保護者に役立つ記事を掲載し、活用できるよう心掛けています。

5 終わりに

忘れられない恩師の言葉がある。

「どんな子であれ、誰しも、何かの才能の芽をもっている。その芽を伸ばすための最高の養分は、信じてあげることです。」

人によって、早く芽吹く人もいれば、時間がたってから、急に伸び出す人もいます。

しかし、いつかは必ず才能の芽が伸びることを信じて、温かく見守り、根気よく励ましを重ねていくことです。」

私はこの言葉に答えるため、初任以来、毎年「子どもの成長を伝える学級通信の発行」「一年間に1人100冊の読書」「必ず全員に受賞の喜びを味わわせる」に挑戦してきた。

これからも、担任している子どもたちと、本校職員の頑張りを心から讃え、エールを送っていききたいと決意している。

研修を生かす

本校の実態を生かした校内研究 ～児童間の学び合いによる算数学習～

千葉県立源小学校教諭 ゆあさ 湯浅 まさゆき 正幸

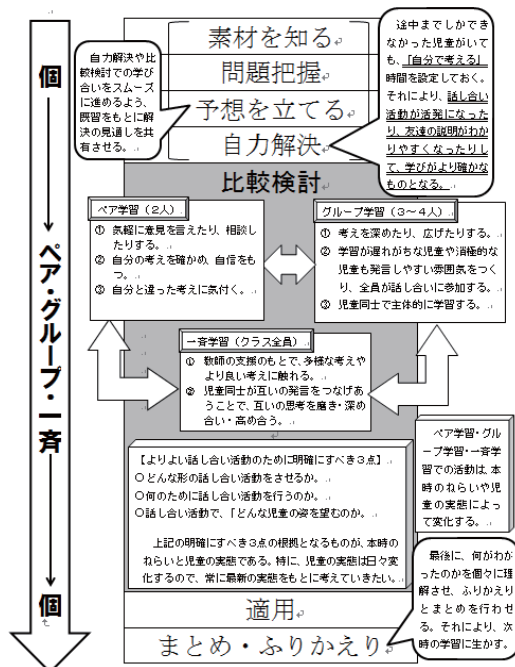


1 はじめに

本校では、児童の学力差が学習指導での課題であった。そこで、「学力差を課題とするのではなく、学力差に配慮した授業づくりができないか」「本校児童の児童相互の関わりをの良さを生かせる指導法はないか」と考え、「算数科での学び合いによって児童全員が『わかる・できる』学習指導」を研究の柱とした。

2 研究の実践内容

【本校での学習活動の進め方】



本校の学び合いでは、教える側の児童が「教えてあげるよ。」と声をかけるのではなく、教えてほしい児童から「ねえ、ここどうするの?」と質問することが大切であると考えた。なぜならば、児童が友達の考え方を受け身で聞いているだけでは、学びが深まらなないと考えたからである。

また、学び合いの前に、児童一人一人が

じっくり問題に向き合う時間を確保した。最初から解き方を教わった場合と、自力で考えた後で解き方を教わった場合とでは、理解度が違うと考えたからである。

さらに、自分の考えをもたずに話し合いをすると、友達の考えに流され、自分で考えないままに終わってしまう姿も見られた。そこで、自力解決で問題に取り組んだ後に、比較検討の場面で学び合いを行うようにした。

加えて、児童全員が自力解決を行えるよう、全員で解決の見通しを共有した。それにより、児童一人一人が自分の考えをもって課題と向き合うことができ、話し合いにも誰もが自分の考えをもって参加できるようになった。

次に、比較検討では、「児童一人一人の発言の機会を増やすペア学習やグループ学習」「多様な考えに触れたり、本時のねらいにせまったりする一斉学習」等、指導のねらいに合わせた学習形態を取り入れた。これらの学習形態は、児童の発達段階及び、本時のねらいや学級の実態に応じて組み合わせて行った。

3 研究の成果

今回の実践では大きな成果が見られた。例えば、「友達にわかりやすく説明できた時が楽しい」「友達に教わって、わかった時が楽しい」と学ぶ活動そのものを楽しみとする児童が増えたこと、友達に伝えることを意識して、ノートのとめ方において図や絵などが一目でわかるものになったことなどである。

この指導法は、算数でしかできないものではない。今後は他教科でも応用しながら、本校職員で作り上げた指導法が児童にも職員にも財産として残るものにしていきたい。

授業を
創る

授業の前後にあるものを大切にしたい

いすみ市立岬中学校教諭

おうみ
近江

ただし
正



1 はじめに

教師生活も26年目を迎え、いつの間にかこれまで多くの先輩方から教えていただき実践してきたことを後進の先生方に伝達するような立場となり、ここ数年、各種研修会の講師を拙いながら務めさせていただく機会が増えた。そのような中、本誌への寄稿依頼があり、分不相応ながら若い先生方の授業実践への一助になればという思いで、執筆をお受けした。以下、授業を創る上で特に私が大切に考えていることを述べたいと思う。

2 三つの大切なこと

(1) 「何を教えるか？」を大切に

私は、「どのように教えるか？」ということよりも「何を教えるか？」ということ、常に授業前の自分に問うようにしている。相撲では、本番前、相手の右の上手を取って投げようと考えていたところ、体をかわされたため、左の下手を取って押し出すということは、普通にあることである。

これは、授業にも通じる部分があり、学習の目的を達成するためには、いくつか考えた方法の中からその場の状況にあった方法を選択し、軌道修正をしながら進めていく、または、場合によっては考えの中になかった方法がその場で生まれて進めていく、そのような授業があってもよいと私は考える。むしろ「どのように」ではなく「何を」を強く意識していると、そのようになっていくことの方が自然であるとも感じている。何より、このような思いで授業

に臨むと生徒一人一人の反応にやりがいを感じ、教師自身もわくわくするような楽しい気持ちで授業を行うことができる。

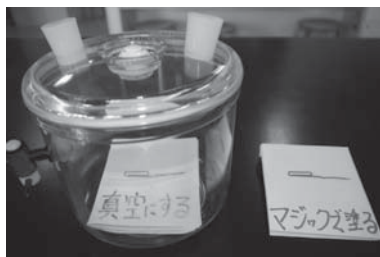
また、よりよい授業が一つの方法だけでなく何通りもあり、それを場に応じて使い分けられるようになればという気持ちを持つと、自分の指導法の引き出しを増やそうという意欲にもつながり、公開授業にヒントを探しに行ったり、文献やインターネットで調べたり、最近ではデジタル教科書を活用したりと、もうじき50歳を迎える私でも、新鮮な気持ちで新しい教材開発・授業研究に臨めるようになる。「何を教えるか？」というねらいは決しておれることなく、その都度、その場に適した指導法を年間指導計画や評価基準との整合性は保ちつつも工夫し模索していくことが、より楽しく充実した授業に繋がっていくと私は実感している。

(2) 「実生活とのつながりは？」を大切に

私が担当している中学校理科の学習指導要領では、「理科を学ぶことの意義や有用性を実感する機会をもたせること、実社会・実生活との関連を充実させること」が重視されている。私は、授業を創る上で、実生活との関連について、どのように扱えば生徒たちの驚きや探求心に繋がっていくかを常に意識するようにしている。例えば、「穏やかな酸化」に関する授業では、「熱や光を出さない酸化はあるだろうか？」という学習課題を設定し、鉄のクリップが空気中や水中で錆びる実験を行わせる。そして、科学的な手順に沿ってレポートを作成させる。[鉄は錆びた(結果)。加熱な

しでも空気中で酸化は行なわれる(結論)。場合は物質が触れあうことで起こるため、空気中に含まれる酸素が鉄と触れあったからである(根拠)。]　ここまでで、学習課題の解決はなされるが、次に「では、この鉄のクリップが錆びないような工夫を考え、班で相談してごらん。」と発問をする。すると生徒たちは、マジックで表面を塗る、真空にした容器に入れる、知識の豊富な生徒の中には黒さびで金属皮膜をつくるなどの意見が出てくる。その後、可能な限り生徒が計画した実験のサポートをしてやる。そして、その実験から得られるものが、身近な実生活にも役立っていること(本実験では塗料等)に気付かせる。幸い、最近の教科書は実生活との関わりについて、かなり多くの参考資料が掲載されているので、これを効果的に活用

し、実生活との関わりを明確に授業に位置付けていくことで、生徒の視野の広がりや思考の深まりにも繋がっていくと考える。



(3)「なぜ勉強をするのか？」を大切に

「なぜ勉強をしなきゃならないか？」という生徒の中に潜在的にある問いを、私は4月当初の授業で考えさせるようにしている。そして、いろいろ出された意見にコメントをした後、最後に次のような話をしている。

「およそ200万年前、豊かだったアフリカの森林に暮らしていた人間の先祖が、気候の変化によって草原に出ていかざるを得なくなり、そこで獰猛な肉食獣から身を守って生きのびるために群れをつくるようになり、その中で争いごとが起こらないようにルールを決め、更に目や鼻の良いものは敵を監視する役、力の強いものは相手と対峙する役、このように集団

の中での役割を決め、互いに支えあうことでより安全に生き残る術を身に付けていった。その後、足跡から敵の種類や位置を予測したり、雲のようすから雨を予測したりする知恵も身につけ、それぞれの得意技や知恵を子どもたちに教えるようになった。それが勉強の始まりである。

だから昔も今も、人間は集団の中でのルールを守り、自分の役割を果たし、自分の得た技術や知恵を次の世代に残す。これが何万年も前から引き継がれた人間の本分であり、君たちが勉強をしなければならない本質的な理由である。そして学校という社会は、その積み重ねを行うための大切な場所である。

また、人間は『知恵』という武器を進化させて最強の生物になったために、「知りたい」という欲求にあらがえない性分となった。せっかくならば、その『知りたい』という欲求を趣味や遊びだけではなく、授業や希望の職業へ向けた取り組みに広げていくと毎日の生活がより豊かになり、将来にも繋がっていく。その知りたいという好奇心は、大人になると徐々に薄れていくものであるため、『今、勉強する』ことが大事である。」

このような話や、日本の産業構造、生計を立てる苦勞、偉人の生き方等の「そもそも論」を考えさせ、自分なりの「なぜ勉強をするのか？」という答えの一端を見出させることで、しっかりと根の張った学習意欲の高まりにつながっていくと感じている。

3 おわりに

以上、この三つの問いかけを、授業に臨む基本として、これからも熱意をもって生徒と共に創りあげる授業を追い求めていきたい。

子どもを知る

教える道の第一歩

成田市立成田小学校教諭 かわづ りょうた 川津 亮太



私は2年目を迎え、昨年度の学級を引き続き担任している。6年生は行事も授業も濃密で、充実した日々を過ごしている。子どもたちは日々変化し新たな面を見せてくれる。指導に難しさや自分自身の力のなさを感じる場面も少なくないが、それでも、授業にわずかな手ごたえを感じたときや、共通の話題で盛り上がったときの子どもたちの笑顔が私の原動力となっている。

初任者研修では、たくさんの同期の仲間たちとともに学ぶことができる。教師としての心構え、接遇の基礎、学習指導、生徒指導など、内容は多岐にわたる。誰一人として同じ人はいないけれども、子どもたちのためにという思いが研修の一体感を生む。自分に足りないものは何か。学んだことをどのように教室で子どもたちに伝えていくのか。研修の成果を教室で実践し、校内初任者指導の先生からもここがポイントだよ、こうしたほうがよかったよと何度も御指導いただいた。その全てが私にとって、かけがえのない生きた財産となっている。特に心掛けていることは、たくさんのことを詰め込まないことである。つい、あれもこれもとやめたいが、確実に一つのことを教えるということをお願いしたい。

毎日が手探りで、不安もある。しかし、学級の子どもは私を信じ、ついてこようとしてくれる。わからなければ教えてくださる先輩方にも恵まれた。初任者研修で学んだことを生かしながら、日々精進していきたい。

子どもを知る

共生 ～向上する姿を見せること～

県立船橋法典高等学校教諭 ひらい とおる 平井 徹



採用されて二年目になり、初めての担任を任された。春休みには既に責任感を強く自覚して、毎日のように頭の中では「必要な教具は何だろうか」「最初のHRに何を話そうか」「保護者との連絡を密にしなければ」「学級の目標とルール作りを徹底しなければ」などの考えが巡っていた。4月になり、新しい学級がスタートするとそわそわしている私の姿を見て、なんだか生徒もそわそわしている。私が明るく振る舞えば生徒の反応も明るく、不機嫌な顔をすればその日の学級が暗くなる。

生徒はどんな姿でも教員の姿を見て何かしらの影響を受けている。卒業時には18歳になっている高校生はある意味で大人ではあるが、まだまだ子どもでもある。特に私の勤務校ではまだまだ先を見通して行動することが苦手な生徒が多い。私は彼らを親しく導く兄のような存在であると共に、最も歳の近い信頼できる大人の見本でありたい。

授業を通して伝えたいことや、日常生活での言動から伝えなければいけないことがたくさんある。私が若いからこそ彼らに伝えられることもあり、また私自身が学ぶことも多い。変化の激しい先行きが不透明な時代になっても、主体的に協働しながら社会に生きる姿の見本を提示したいものだ。「私も頑張るからキミたちも頑張れ。」そう思いながら生徒を鼓舞し、生徒を支えられる喜びをかみしめている。一教員として、社会人として向上心を忘れずに日々を邁進していきたい。